

# 朱華国後宮恋奇譚2

## 狙われた皇帝は片翼の少女を愛し抜く

綾瀬ありる Ariru Ayase



アルファポリス文庫

第一話 消える妃

「なかなか尻尾を掴ませないな、あの伯母は」

榻こかけの背もたれに身体を預け、憂炎ユウエンはため息交じりにそう呟いた。その眉間には深い皺が寄り、閉じた目元にはうつつすらと隈くまが浮いている。

わずかに乱れた黒髪をうつつとうしげに手で払いのける仕草も、どこことなく緩慢だ。どうやら、かなり疲れているらしい。

それもそうだろうな、と翠蘭スイランは小さくため息を漏らした。

なにしろ彼は、皇帝としての責務をきっちりとなしつつ、ひっそりと伯母、つまり皇族の一人である梓晴スイゼンに関する調べを進めているのだから。

先日起きた、翠蘭の暗殺未遂。その糸を後ろで引いていたのは、おそらく梓晴だ。少なくとも、憂炎はそう確信しているようだ。

曰く、状況から考えてその可能性が一番高いのだと。

だが、実行犯であった侍女の明玉メイユと梓晴、二人を結びつけるものは何も見つからない。

相手が相手だけにおおつびらに調べ回るわけにもいかず、調査は遅々として進んでいない、というのが現状である。

それに加え、憂炎は更に別の件でも彼女を疑っていた。

翠蘭の故郷が襲撃された件だ。

あの時は宋尚書ソウジョウショの企みであるとされたし、出てきた証拠もそれを裏付けていた。だが、現状を鑑みればこれも梓晴が裏で糸を引いていたと考えるのが妥当だということである。

「おそらく、母の命を承らえる可能性を潰したかったのだろうな」

そう話す憂炎の声は、少しばかり暗い。その内心を慮り、翠蘭はそつと彼の手を握った。

いくらうまくいっていないとはいえ、身内同士の諍いさかいはやはり心の重荷となっ  
ているはずだ。

しかも、憂炎の疑いが真実であるならば、伯母が母を……つまり、姉が妹を殺そうとしていたも同然ということになるのだから。

(私の立場で例えれば、私と皓字ハクジが、ということだものね……)

もしも自分が皓宇に死を願われていたら、どんな気持ちができるだろうか。そう仮定してみるだけで、涙が滲みそうになる。

梓晴と美雨——二人の姉妹としての関係性がどんなものだったかは知らないが、血縁というのは切っても切れない間柄。それなりにお互い思うこともあっただろう。

家族仲が良かった翠蘭は、自分達のような家ばかりではないと分かっているけど、どうしても梓晴の気持ちの理解しきれない。一体どうして、梓晴はそれほどまでに皇帝の地位を欲したのだろうか。単に自身が長姉であるというだけで、そこまで地位に執着するものだろうか。

翠蘭は小さな吐息を漏らし、軽く頭を振った。

自分自身、長子でありながら当主の座は異能を持つ弟のものど物心ついた頃には決まっている身だった。一族で長になるべきは、異能を持った人間であり、そこには男であるとか女であるとかは関係がなかった。

何代か前には、女でありながら異能を持ち、一族の長としてみなをとりまとめた存在もいたと聞く。

だがそれでも、弟を押しつけて自身が長になりたいと、そんな風に考えたことはない。

むしろ——

翠蘭は胸の中に生じたもやもやを振り払うかのように、もう一度息を吐き出した。と同時に目の前から再び「はあ」と大きく息を吐く音が聞こえてくる。

顔を上げると、憂炎が「どうしたものか」と小さく呟く声が耳に届く。

どうやら、彼を悩ませる新たな事態が発生しているらしい。心配げにその顔を見つめると、彼は頬杖をついていた手をひらひらと振ってみせた。

「いや——タイミングが良いというのか、なんとというのか。羅睿が朝廷に復帰してきたしな」

「ああ……」

そういえば、と翠蘭は頷いた。

羅睿というのは、梓晴の夫である。戸部の尚書を務めていたが、しばらく病を理由に朝廷から離れていた。それが唐突に、「快癒した」と申し出て職務に復帰してきたのだ。どう考えても怪しい。だが、羅一族といえば皇女が降嫁するほどの重鎮だ。そして、その長である羅睿はといえば、彼が復帰したことと仕事か、務に長けた人間である。



よほど混乱していたのだろう。気付けば集落から少し離れた場所に父を連れて避難し、そこで介抱をしていたところからしかはつきりとした記憶がない。

父が亡くなるまではひたすら看病をすることで他のことから目をそらし、父を失ったからは辛い記憶のある故郷の地を踏むこともできず、ただどうにかして復讐を成し遂げたいという気持ちからこの後宮へやってきた。

あの時、無理矢理にでも一度故郷に帰っていれば、何か見つけられたかもしれないのに。

(何の役にも立てない……)

重苦しい気持ちに支配され、翠蘭は唇を噛んで軽く首を振った。

「ごめんなさい……今はちよつと」

「いや、いいんだ……すまない。気にしないでくれ」

憂炎はそう笑うが、翠蘭の心には、それが重いしこりとなってわだかまっていた。



(このまま大人しく、憂炎に全てを任せたままでいいの……?)

その思いは日に日に強くなっていく。だが、自分には彼の調査を手伝えるような技能は何一つなかった。

皇帝の正室として内定しているが、正室となるための婚姻の儀がまだなので、正式な地位としては後宮に住まう妃の一人だ。調査のために人員を動かすような権限も余裕もない。一般的な妃であれば、生家の力を頼るのだろうが、その生家を根こそぎ奪った人間を調べているのだ。

そのことが、翠蘭を焦らせる。

「……私は」

彼の片翼。お互いに助けあい、二人で全て乗り越えていこうと約束したのに。

このままでは、ただの足手まといだ。

(なにか、私にできること……)

薄暗くなった部屋の中、明かりもつけずにじっと座り込み、翠蘭は必死に考えを巡らせた。心配した侍女が様子を見に来たが、少しの間一人にしてほしいと頼むと何か察するものでもあったのだろうか。

何かあったらすぐにお呼びください、と言い置いて静かに下がっていく。

その後ろ姿を見送ったとき、不意に明玉の姿が重なって見えた。  
(そうだ……)

彼女の無念な気持ちはどうにか晴らしてやらなければ。

ぎゅっと拳を握り締め、翠蘭はそう強く心に誓った。

そうでなければ、浮かばれないだろう。

(考える……考える……)

自分にとって、何かできることがあるはずだ。しばらくそう考えて、唸って——はつと何かに気付いたように、翠蘭は顔を上げるとぱちんと手を打ち合わせた。

「そうよ！」

思い出せることがないのなら、現場に戻ってみればいい。もしかしたら、そこでなら何か違和感に気付くことができるかも。

(そうよ、それに……あそこにいけば、あの時生き残った人たちがいる)

あの後、故郷から出ていった者達もいたが、何人かはその場に残ったはずだ。彼らに話を聞けば、何か手がかりが掴めるかもしれない。

思いついてしまったら、もういても経ってもいられなかった。気が急いで、他のことなど頭からすっぱりと抜け落ちてしまう。

勢いよく立ち上がった翠蘭は、部屋の奥へと駆け込むと古びた行李を引きずり出した。

ぱっぱと蓋の上に薄く積もった埃を払い、少々立て付けの悪い蓋を乱暴に外す。

中から出てきたのは、男物の衣服だ。そう、ここがまだ男後宮であった頃に着用していたものである。

「まだ処分していなくて良かったわ」

そう独りごちながら、ひらひらとした襦袢を脱ぎ捨て、胸元に晒しを巻く。それから男物の袍を身に纏うと、結び上げていた髪をほどいてひとまとめにし、高めの位置で結んだ。

その姿を鏡に映してみれば、あの頃と同じ、まるで少年のような姿になる。

(よし、大丈夫そうね)

念のため斜めから後ろ姿を確認してみたが、問題なさそうだ。

机の抽斗から、いくばくかの貨幣を取り出し懐に忍ばせる。あまり蓄えは多くはな

いのだが、まあこれだけあれば路銀ろぎんとしては充分だろう。

ここから故郷まではだいぶ距離がある。普通なら、一週間以上かかるだろう。だが、幸いなことに麓の村からそう遠くないところを、西域との交易路が通っている。きちんと整備された大きな路ということもあり、急ぎの荷馬車が昼夜間わず走っていたはずだ。

うまいこと頼み込めば、それに乗せてもらうことができるだろう。そうすれば、かなり時間を短縮できる。

(二週間ちよつと、というところかな……)

それくらいならば、自分が不在にしてもなんとかなるだろう。妃が必ず出なければならぬ宴の準備にも、どうにか間に合う。

頭の中でそう計算しながら、翠蘭は抽斗の中に視線を向けた。そこには、布に嚴重に包まれた細長いものがしまい込まれている。

それを取り出した翠蘭は、慎重に布をめくった。と、その中から出てきたのは一本かみきしの簪である。

それをぎゅつと握り締め、翠蘭は小さく息を吐き出した。

「これだけは、持って行こう」

他の装飾品は華美すぎて、万が一落とした場合に大変なことになる。だがこれはいだろう。

(憂炎がくれたものだから)

お守り代わりだ。もう一度布にくるみ直すと、翠蘭はそれをそつと懐の中に忍ばせた。扉の外の様子をそつと窺い、静かに部屋から外へ出る。

幸い、人払いをしていたお陰で周囲に人の姿はないようだ。それに少し安堵して、足音を立てぬよう気をつけて天青宮を抜け出す。

後宮の敷地から出ていくのは、実はそれほど難しいことではなかった。

翠蘭と春燕チンゼンしか妃のいない今、後宮内は閑散としている。夜に見回りをする衛士はいるが、ここで生活しているのだから巡回の時間を把握することは容易たやすい。

闇に紛れやすいよう、濃紺の袍を纏った翠蘭は、それでも周囲を注意深く窺いつつ抜け道へと向かった。

途中、抜け穴が塞がれている可能性に思い至って冷や汗を掻いたが、幸運なこと———というか、その存在を憂炎も便利に使っているからだろう、以前と変わりなく、

そのままの姿だ。

ほっと息を吐き、翠蘭は辺りの様子を窺いつつ穴から外へと抜け出した。

(よし……)

深夜ということもあり、あたりには人の気配はない。小さく息を吐き、翠蘭はそのまま闇に紛れて姿を消した。

## 第二話 故郷

翠蘭が姿を消した、ということをいち早く知ったのは、爛流ラウリウであった。

「一体何が起きてるといふんだ……」

部屋には荒らされた形跡はない。となると、翠蘭は自ら出て行った可能性の方が強い。しかし、爛流から見ても憂炎と彼女の結び付きは深いように見え、わざわざ出ていく可能性は低いように思われた。

とりあえず側仕えの侍女たちにつく口止めをし、報告のため憂炎の元へと向かう。「大家……」

当の憂炎はといえば、朝の鍛錬を終えて着替えを済ませたところのようであった。これから朝食を摂り、政務に向かうことになっている。

そこへ、慌ただしく爛流が飛び込んできたものだから、彼は少々驚いた様子だった。「どうした爛流……寝坊でもして朝食を食べ損ねたのか？」

「いえ、それどころではなくて……！」

自分では落ち着いているつもりだったが、焦りが顔に出てしまっていただろうか。

そう思った爛流が、慌てて自分の頬を撫でる。

その様子を見た憂炎は、はは、と軽く笑うと「それで」と小さく肩をすくめつつ話の続きを促した。

だが、周囲に人がいる今の状況では、翠蘭が姿を消したことを話すのはまずい。

人払いを願うと、さすがに憂炎もただ事ではないと察したようだ。周囲にいた侍従たちに下がるよう伝えると「どうした？」とこちらの話を促してきた。

はあ、と小さくため息をついた爛流が、この次第を憂炎に伝える。

「部屋には荒らされた形跡はなく、おそらくですが、ご自分で出て行かれたものかと」「くそ……あいつ……！」

それを聞いた憂炎は、慌てて駆け込んできた彼の前で思わず舌打ちをした。

翠蘭がどうしていなくなったのか、その理由に心当たりがあったからだ。

思い返せば、最近はどうにも様子がおかしかった。それに気付いていながら、翠蘭の行動を予測できなかった自分に腹が立つ。

（俺が、あんなことを聞いたせいかな……）

苛立たしさにまかせて椅子の手摺りを叩くと、爛流がわずかに首をすくめる気配が

した。それに気づいて、はあ、と深く息を吐き出す。

「すまない」

「いえ、それよりも……どういたしますか」

心を乱されている憂炎とは違い、爛流は冷静であった。付き合いの長い彼のことだ、おそらく憂炎が何と云うか予測しているのだろう。

改めて見れば、いつぞや身に着けていた質素な袍に身を包んでいる。

準備万端、というわけだ。

(まったく、こいつは……)

どうしたって、爛流は憂炎に甘い。おそらく、自分のためならなんでもするだろう。それに加え、きつと彼は憂炎が自ら翠蘭を探しに行くと言い出さないよう、先手を打ってきたのだろう。

そう思い至つて思わず苦笑した憂炎は、どっかりとかたわらの榻に腰を下ろした。

ここまできたら、自分に言えることはただ一つだ。

「……悪いな」

そう呟くと、爛流が口元に笑みを浮かべる。

「大家のことですから、そうお命じになるのだろうと思っておりました」

「さすがだな」

憂炎は苦笑し、肩をすくめた。さすが幼少期から共に過ごしてきた間柄である。

こちらの考えそうなことなど、筒抜けだということだ。

「では爛流、悪いが翠蘭の後を追ひ、助けになってやってくれ」

「承知いたしました」

そう答えた爛流が、一礼し素早く憂炎の元を辞してゆく。その背中を見送りながら、憂炎はもう一度「はあ」と大きく息を吐き出し、背もたれに勢いよく身体を預けた。

「……無事でいてくれよ、翠蘭」

いいや——彼女に何事かがあれば、おそらく自分にはわかるはず。首の後ろにある朱雀の徴しるしをそつと撫で、憂炎は独りごちた。

だが、そうだとしても、そんなことにならぬよう翠蘭を守りたい——というのが憂炎の偽らざる本音だ。

いや、もつと云うのならば、いつも目の届くところにおいて、大切にしたい。

ぎゅつと拳を握り締め、憂炎は「無事でいてくれ」と呟いた。

一方翠蘭はといえば――

「お兄ちゃん、そろそろ見えてきたよ」

馬車に乗せてくれた老人に声をかけられ、翠蘭は顔を上げた。目の前にはのどかな田園風景が広がり、太陽の光を反射した植物の葉が眩しく見える。

うわ、と小さく眩くと、翠蘭は老人を振り返った。

「ありがとう」

そうお礼を言うと、彼はにこにここと微笑み「いんやあ……」と照れたように顔を掻いた。

旅慣れている、とまではいかないが、これでも世間知らずの貴族ではなく、市井で生きてきた身だ。乗合馬車や水路を用いて、一週間ほどの時間をかけ、翠蘭はようやく故郷の集落近くまで辿り着いた。

「どうせ帰り道だかんなあ」

話し相手になってもらえて助かったくらいだあ、と笑う老人に謝礼を渡し、馬車から降りる。地面に降りると、踏まれた草の青臭い匂いが鼻をついた。

それは決して嫌な匂いではない。どこか懐かしく、心が震えるような――そんな匂いである。

口元に微笑を浮かべ、翠蘭は「さて」と呟いた。

ここまでは馬車に乗せてもらったが、この先は徒歩で行くしかない。この先は別の方向へと向かう老人に別れを告げると、翠蘭は故郷に連なる山を見上げ小さく息を吐いた。

まだ太陽は頂点へ昇ったばかりだが、急がないとあつという間に陽は暮れるだろう。疲れていないといえれば嘘になるが、あと少し踏ん張るしかない。翠蘭は気合いを入れ直すと、まずは麓ふもとの村へと足を踏み入れた。

「……変わりないなあ、ここは」

さあ、と吹く風が田畑の作物を揺らし、ささやかな音を奏でている。道ばたでは子ども達が走り回り、大人たちは農作業に精を出していた。

その様子を見まわし、懐かしさに目を細める。

村の中心へと歩いて行くと、前方に少しひらけた場所が見えてきた。おそらく、村の集云などで使われる広場だろう。遠目に見ても、そこに少し人だかりができてい

ようであった。

何かと思つて少し急ぎ足で近づき、輪の中心を覗き込む。と、ここでは日に焼けたように褐色の肌をした男——胡人の男が敷いた筵の上に細々とした商品を並べ、それを商あきなっているようだった。

「あー……」

そうか、と翠蘭は小さく頷いた。そういえば、ここは少し外れてはいるが、胡人たちの住まう西の国、サルグからの交易路に近い場所だ。そのため、昔も胡人がちらほらとこの村に商いにやってきていたのだ。

時たま麓に降りたときに出くわすと、皓宇が興味深げにその姿を見つめていたことが思い起こされる。

周囲を見まわしてみると、商いをしている男の他にも遊びを教えているのだろうか、小さい子ども達に群がられている胡人の姿も見えた。

その先に置かれた馬車は、彼らの乗ってきたものだろう。なかなか頑丈な造りをした大きめのものが、何台か停められているのが見えた。

そこには、かなりの量の荷物が載せられている。

これから首都まで行くのか——もしくは売るものを売り、買うものを買った帰り道なのか。どちらとも知れないが、商売熱心なことには違いない。

(ところで、ここではどんなものを売っているのかな……?)

首都で見かけた彼らはかなり様々なものを売っていた。それこそ生鮮食品から日持ちのする加工食品、お菓子に装飾品などなど。

ひよいと覗き込むと、そこには日常使いに良さそうな食器や小物、それから小ぶりの装飾品に、西の国らしい意匠の布などが並べられていた。

それを女たちがキラキラした瞳で物珍しげにあれやこれやと品定めし、時には値引きの交渉などを行っている。

活気溢れるその様子に、翠蘭はくすりと笑った。

(どこでも人は同じなんだな)

そう、首都の東西の市でも、こんな光景は見られた。それが思い起こされ、こんな時だというのになんだか楽しい気分になってくる。

もう少し、と品物を覗き込んでいたその時。

ふと、誰かの視線を感じたような気がして、翠蘭は顔を上げた。振り返ると、そこ

には何人かの胡人の姿がある。

だが、その誰もこちらを見てはいない。

(……………)

気のせいだろうか。翠蘭は軽く頭を振ると、顔にかかった髪を手で払いのけた。もしかすると、少し疲れているのかもしれない。それが神経が少し過敏になっているのかも。

それもそうだろう。父を亡くして以来、故郷の集落に足を踏み入れるのは初めてだ。知らず気が昂ぶっていたとしてもしかたがないだろう。

大きく息を吐き出すと、翠蘭は自らの顔を両手で叩き、気合いを入れた。ぱしん、と小気味のいい音が響き、隣にいた女が驚いたようにこちらを見る。

(そうだ……早く故郷に向かわないと)

ここからは山を登らなければならぬのだ。グズグズしていると日が暮れてしまう。そうなれば、山を登るのは困難になる。

あまり時間を無駄にはできない。ここまでの道中で、少し気が緩んでいたのかもしれない。翠蘭はくるりと踵かかとを返した。

と、その向こうから胡人が歩いてくるのが見える。  
(あれ……………?)

一瞬、その線の細さから女かと思った。めずらしい、と思ったが近づくにつれそのシルエットがはっきりしてくると、その人物が男だということが分かる。

だが、驚くことにその胡人の男は周囲の誰と比べてもはっきりと違って見えるほど容姿に優れていた。

胡人の特徴である日に焼けたような褐色の肌あぶりくに、暗緑の瞳あんりく。それに加え、彫りの深い顔立ちあざなは他の男たちと同様だ。だがその男は、彼らのように髭を伸ばしたりはせず、綺麗に剃っている。

確か、サルグでは髭の濃い方が男らしさを表し、魅力が高いとされているのだという。そのため、髭を伸ばしている人が多いと聞いていたから、その真逆を行く存在というわけだ。

だが、それを差し引いても——あるいは朱華国しゅかこくの基準で見ても、さうからだろうか、国中の美男を集めた後宮で過ごし、憂炎や爛流のような器量よしを見慣れている翠蘭でさえ、一瞬目を奪われるほどの美男子であった。

「すごいな……」

思わず唇から零れた言葉は、聞こえてしまっただろうか。はっと口元を押さえたが、その胡人の男は翠蘭の視線に気付いた様子もなく、悠々と歩き去って行った。

その後ろ姿を見送って、ほうっと小さく息を吐く。

(世の中にはまだまだ美男がいるものだなあ……)

多少目の保養になったかもしれない。くすりと笑ひ、翠蘭は故郷を目指すべく山へと向かった。

故郷に戻るのには久しぶりだ。あの事件以来、生き残ったわずかな一族の者でさえ、その多くが出て行ったと聞いている。人の行き来などほとんどないだろう。

道も荒れているのではないか、という翠蘭の危惧に反し、まるで最近誰かが通ったかのように、草に踏まれた形跡がある。

(……?)

不思議に思ったものの、集落に残ったうちの誰かが買い出しに出たばかりなのかもしれない。そう考えれば納得できるため、翠蘭は疑問をそのままにしばらく山道を登

り、ようやく故郷の地を踏んだ。

「……っ」

入り口を隠すように植えられていた木立を抜けると一気に視界が開け、目の前に空間が広がる。一瞬まぶしさに目を細め、翠蘭はゆっくりとまぶたを開いた。

その先に広がっていた光景に、思わず息を呑む。

(こ、これは……)

自分の記憶にあるよりも、故郷の集落は荒れ果てた様相であった。

焼け落ちた家は当時のそのまま、周囲には草がびっしりと生え、残った柱に葛つたが絡んでいる。塀はひび割れ、その隙間からは雑草が顔を出していた。

奇跡的に焼け残り、修繕して使っていたであろう家も、今では戸が壊され、壁も剥がれてぼろぼろになっている。

「酷いありさまだな……」

そう呟くと、自分の家があったあたりへと足を進める。足元の砂利が小さな音を立て、それがなんとも懐かしく、それと同時にもの悲しさを運んできた。

しばらくすると、半分崩れた建物が姿を現す。

(ああ……)

心の中で呻き声を上げ、翠蘭は足を止めた。視線の先にあるのは、あの日焼け落ちたままの邸の姿だ。

おそらくここを重点的に狙ったのだろう——他の家屋よりも、損傷の具合が酷いのが今見てもわかる。そのさまに、翠蘭はぎゅつと拳を握り締めた。今にも唇から嘆きの声が出そうなのを堪え、周囲を見まわす。

(何か……を……)

無理矢理にでも頭を働かせなければ、そのまま膝から崩れ落ちてしまいそうだ。翠蘭は唇を噛みしめ、辺りを見まわした。

ここに来たのは、ただ嘆くためではない。何か、あの日には気付かなかったことを思い出すためだ。

ぱきり、と足元で踏んだ枝が折れる音がする。翠蘭は目を凝らし、周辺を観察し始めた。

### 第三話 憾み

ここに来てどれくらい時間が経過しただろう。

(そう簡単にはいかないか……)

しばらく周辺を見て回った翠蘭は、大きなため息をこぼすと空を見上げた。

ほんのりと茜色に染まり始めた空が、時間の経過を容赦なく告げてくる。あと一時間もしないうちに日が暮れてしまうだろう。

だが、何の手がかりも見つけることができていない。ため息も、そりゃ大きくも成ろうというものだった。

なにしろ、事が起きたのはもう二年も前のことだ。翠蘭も混乱していたし、なにより寝起きすぐの出来事だったことも大きい。

しかも、皓宇が連れて行かれる時に自身の身体に起きた異変のせいで、そのまま倒れてしまってもいたのである。

そんな状況だったことを思えば、当時の記憶がないのも無理はない。違和感など、一朝一夕に見つかるわけもなかった。

これは、しばらく腰を据えて、よく見て回らなければ。

(となれば……)

翠蘭は顔を上げ、辺りを見まわした。どこか、状態の良い家を見つけて、そこを宿代わりにしようと考えたからだ。

(それにしても……)

翠蘭はふと首を傾げた。来るときに見た道の状況から、誰かがここに残って生活をしているものだと思っていたが、全く人の気配がない。

少なくとも、翠蘭が出て行くまでは一緒に何人かが生活していたはずだ。彼らも出て行ってしまったのだろうか。

「いや、だとしたら、あの草を踏んだ跡は……?」

どう見ても、この集落に人が住んでいると言うのは無理がある。だとすると、いったい誰があの足跡を残したのだろう。

もしかすると、憂炎はここにも調査の人員を送っていたのだろうか。ふむ、と考え込んだその時だ。

がさり、と背後で草を踏む音がして、翠蘭はぎくりと身を震わせた。

(何者……!?)

これまで、人の気配などなかったのに、もしや——と最悪の想像が脳裏を過り、緊張が身体に走る。

だが、そんな翠蘭の予想とは裏腹に、かけられた声はどこか頼りなく、弱々しいものだった。

「あの、もしや……あなたは」

「……あ」

恐る恐る振り返ると、そこに立っていたのは初老の夫婦である。その姿にどこか見覚えのようなものを感じ、翠蘭は記憶を探った。

だが、彼女が思い出すよりも彼らの方が先に自分の正体について見当をつけていたらしい。

「もしやあなたは……皓宇さまでは……?」

「えっ……」

彼らの口から出てきた思わぬ名前に、小さく息を呑む。だが彼らはそんな翠蘭の反応など気付かぬ様子で、互いに顔を見合わせ頷きあっていた。

「ほれみい……どこかで見たお顔じゃと」

「そんなことを言うても」

どうやら彼らは、翠蘭がここに到着したときから様子を窺っていたらしい。ただ、自分の素性を巡って彼らの中で確信に至らなかったため、ここまで声をかけてこなかったのだという。

「我々はあの襲撃の後、更にこの奥に」

と、老夫婦は背後を振り返った。よく見れば彼らの足元には巧妙に隠されてはいるものの細い路があり、背後の森の中へと続いている。

話によれば、ちりぢりになってしまったと思っていた一族の生き残りたちは、逃げ出した後結局はここへ戻ってきたのだという。そして山奥の更に奥へと身を隠し、細々と生活していたのだと。

「もはや我々は、このまま死んでゆくのだろうと……そう思っておりましたが……」

「ほんに……長もおらんようになって、どうしていいかもわからずに」

そう嘆き会った二人は、「けれど」と翠蘭を振り返る。

「まさか皓宇さまが生き残っていてくださったとは」

「本当に良かった」

瞳を潤ませ、彼らはそう言う。と翠蘭の手を握り締めた。老夫婦の妻はそれこそ今にも泣き出しそうなほどに感激している。

その期待に満ちた視線を裏切るように心苦しいが——翠蘭は一瞬彼らから目を逸らすと、意を決したように口を開いた。

「ごめんなさい……その、私は皓宇ではないの。その姉の……翠蘭よ」

「……なんと」

目を丸くしてこちらを見つめる二人に、簡単に事情を説明する。

皓宇は囚われた先で亡くなったということ、それから父も襲われた時の怪我が元で命を落としたということ。

「そうか……あのお優しいかった長が……」

「皓宇さままで……」

二人は涙ぐみ、手を合わせて二人のために祈ってくれた。その姿を見て、じわりと翠蘭の目にも涙が浮かぶ。

（そうか……）

二人のことをこれほどまでに気にかけてくれる人たちに、全く便りを出していなかった自分は、なんと薄情な人間なのだろう。

いろいろと自分の身に思わぬことが起き、それに精一杯だったとしても、不義理なことだ。そう思うと、翠蘭は唇を噛みしめ、二人が祈る姿を見つめた。

しばらくすると、おちついた二人に近況を尋ねられる。翠蘭は簡単に自分が今置かれている状況について話をした。

すると、最初はしんみりとした様子で話を聞いていた二人の様子が変わる。

「翠蘭さま、なにをおっしゃっているのですか」

「あなたが皇帝の……?」

その敵意すら感じられる声音と眼差しに、はっとする。

（あ、そうか……）

二人には、まだこの集落を襲ったのが皇帝の命を受けた皇軍ではない、という説明をしていなかった。

「違うの、あの……」

「……見損ないましたぞ」

慌てた翠蘭が事情を説明しようと口を開く。だが、それよりも先に延ばした手をぱしりと振り払い、老夫婦の夫がぎろりと翠蘭を睨みつけた。

その気迫のこもった眼差しに、一瞬怯んでしまう。

「我が仇ではありませんか……！ 一体なぜ」

「まさか、富が目が眩んで……？」

激昂した夫婦は、翠蘭が怯んだのを見て取ると、自分の推察が正しいのだと思い込んだようだった。

「嘆かわしい、父君になんと申し開きをされる気なのだ……！」

「ほんに……ああ、なんとということ……っ」

ますます激しく言葉で責め立て、翠蘭が口を挟む隙すら与えない。

思わず一歩後退ると、足元でじやりっと小さな音が立った。

「待って、違う——」

「まだ言うのか……！」

それでもなんとか誤解を解こうと、翠蘭が口を開く。その様子にとりとう我慢ならなくなったのだろう。

老人は手にしていた杖を振りかざすと、翠蘭に向けて振り下ろした。

年齢にしては力強い振りだったが、翠蘭もそれをなんとか躲す。しかし、翠蘭が避けてしまったことでたたらを踏んだ老人は、更に顔を紅潮させ激昂した。

「この……あばずれめ……！」

口汚く罵りながら、むちゃくちゃに杖を振り回してくる。

「ちがつ……、ね、お願い、話を……」

それをなんとか避けながら、翠蘭は必死に話をしようと試みる。だが、老人の耳にはもう届いていないようだった。

避けるな、などと叫びながら、大きく杖を振りかぶり、振り下ろしてくる。それも避けようとした翠蘭の足元が、ずるりと滑った。

（あ、まずい——）

このままだと転んだうえ、杖で打たれてしまう。覚悟を決め、翠蘭はぎゅつと目を閉じた。なんとかダメージを最小限に抑えようと身を固くし、衝撃に備える。

どさりと、と自身の身体が地面に叩きつけられ——

「翠蘭さま……！」

「え……っ!?」

がきん、と重々しい音がしたかと思えば、自分の名前を呼ぶ声が出て、翠蘭は思わず目を開いた。そこで目にしたのは、地味な灰色の袍を纏った背中だ。

「誰……、あ、らっ……爛流!?」

ちらりとこちらを振り返ったその顔に見覚えがある。翠蘭は思わず大声をあげた。  
(な、なんでここに爛流が……!?)

「ご無事ですか、翠蘭さま」

「な、なんだおまえは……!」

爛流の向こうから、老人の怒号が聞こえる。それに気が付いて、翠蘭ははっとした。  
「ちよ、ちよつと爛流、あなた大丈夫、な……」

そこまで口にして、翠蘭は目を瞬かせた。よく見れば、彼は鞆ごと腰に佩<sup>は</sup>いていた剣を構え、老人の杖を防いでいる。

どちらかといえば——いや、憂炎と比べても明らかに線の細い爛流の思わぬところを見せられて、翠蘭は驚いた。

だが、そんな翠蘭の驚きなど構う様子もなく、爛流が「しっかりしてください」と

声を荒げる。

「行きましよう」

「えっ……」

爛流が剣を持った腕をブンと振ると、老人が体勢を崩す。あ、と翠蘭が声をあげるよりも早く老女が慌てた様子で彼に駆け寄った。

こちらから完全に注意が逸れたところで、爛流が「早く」と翠蘭の腕を引っ張る。

そのまま、翠蘭は、爛流に手を引かれるままに走り出した。

「全く、思いもよらないことをなさる」

爛流の乗ってきた馬の背に揺られながら、翠蘭は長々とした爛流のお説教を聞く羽目になっていた。行きは一人だけを乗せてきた馬は、帰りは二人を乗せる羽目になって多少うんざりしているような——そんな心配さえ漂わせている、ような気がする。

(悪いことをしたな……)

追いかけてくる羽目になった爛流にも、この馬にも。

ほとんど思いつきのままに飛び出してきた形である翠蘭は、しゅんと項垂れて彼の

話を聞くほかない。

なにしろ、あのまま興奮した老人に殴られていけば、大怪我をしていたのかもしれないのだ。そこを救ってもらったのだから。

「ごめんなさい……」

素直にそう謝ると、憫流が小さくため息をつく気配がした。

「私よりも、大家に謝っていただきたいですね。ここのほか心配なさっておいでです」

「それは、もちろん……」

翠蘭が大きく頷くと、かすかに笑う気配が伝わってきた。

どうやらお説教はこれで終わりらしい。ほっと息を吐くと、翠蘭は前方へと目を向けた。

あの後、憫流に連れられた翠蘭は、少し戻ったところにある村で一泊させてもらった。そして早朝に出立し、今は交易路としても使われている大きな道を進んでいる。

サルグとの交易が始まってから、この道もだいぶ整備され大きくなった。行き交う人の姿も多く、大きな荷物を抱えて歩いている者から隊列を組んでいる馬車までさまざまだ。

もちろん、翠蘭と憫流のように馬に乗った者もいるし、牛に引かせた荷車などもある。それらを眺めていた翠蘭は、ふと前方に見えた馬車に目をとめた。早朝で涼しいからだろうか、荷台を覆う布を上げ、何人かが外を見ながら談笑している。

そのうちの一人に見覚えがあるような気がしたからだ。

(あれは……)

故郷の山の麓で見た、あの美青年ではないだろうか。

だが、遠目ではそれがあの青年なのかそうでないのか、少し判別が付きにくい。

(サルグでは髭が持て囁はさやされているといっても、全員が生やしているわけではないのだからうし……)

別に朱華国では髭が流行しているわけではないが、気に入っ生やしている者も多い。それと同じだろう。

目をこらしてはみたものの、途中で他の馬車が入ってしまったこともあり、見失ってしまう。

「翠蘭さま??」

「え、あ、ごめんなさい……何?」

ぼうつと考え事をしている間に、欄流が何か話しかけていたらしい。聞いていなかったことを謝りつつ、翠蘭はもう一度馬車の方向に目をやった。だが彼らの馬車は他の旅人たちに紛れ、もう見えなくなっていた。

#### 第四話 宴の準備

このところ、後宮内はどこか慌ただしい雰囲気にも包まれていた。侍女や女官、そして宦官までもがそわそわとして落ち着かない様子である。

ただ、それは悪い雰囲気ではなく、どちらかといえば浮かれた空気であった。それもそのはず——後宮では今、これから迎える桃の季節に合わせた宴の準備が進められているのだ。

これは年に何度か催される大きな宴のうちの一つである。寒い冬がようやく明けて暖かな季節を迎えることを歓迎するといった趣旨のものなのだ。

朱華国の後宮だけでなく、この時期似たような催しは国中で行われており、それを心待ちにしていた者も多い。

後宮内の宴で一切を取り仕切るのは、皇后の職務である。だが、未だ皇后不在の朱華国後宮においては、その唯一の候補である翠蘭の仕事となるはずであった。

しかし——

「こちらはいかがいたしましたでしょうか。どちらも良いと思うのですが……」

「うーん、そうね……」

女官の問いかける声に答えたのは、翠蘭ではなく春燕だ。

後宮から姿を消した翠蘭は、いまだ後宮へ戻ってきていない。そのため「翠蘭は体調が悪く伏せている」と誤魔化して、春燕が変わってその進行を行っているのが現状であった。

まあ、仮にも元皇女の娘である。そのため、春燕は宴を取り仕切った経験はなくとも場にふさわしい物を選ぶ知識はあった。元々翠蘭の手伝いをするつもりだった事もあって、準備は滞りなく進められているのが救いだ。

しばし悩んだ様子を見せた春燕は、二つ頷くと片方を指さし「こちらにしましょう」と結論を出した。

女官は軽く頷くと、広げた荷物を片付け退室しようとする。

それを引き留め、ついではかりに二、三指差を出した春燕は、一息吐こうと茶碗に手を伸ばした。口元に近づけると、馥郁とした香りが鼻を擽る。

口に含むと、ほんのりとした甘さを感じられ、心がほぐされるような気持ちになった。まるで張り詰めていた心が緩むような、そんな心持ちがして、自然と口元がほころぶ。

それでもないつもりだったが、やはり気を張ってしまっていたのだろう。そんな風に、どこか他人事のように思いつつ、春燕はほうつと小さな吐息を漏らした。

「良いお茶ね」

「ありがとうございます」

はにかみながらそう答えた年若い侍女は、新しく翠蘭付きとして雇われた一人だ。名を候佩芳ホウペイファンと言おう。

多忙な憂炎が、それでもしつかりと吟味して選んだ——というだけあって、有能な人物であることがこの仕事ぶりからも見て取れる。

翠蘭が姿を消したときも、慌てず騒がずすぐに爛流に二報を入れたというのだから、大したものだ。

そんな風に感心しながら、春燕は彼女にこりと微笑みかけると杯を置き、小さく肩をすくめてみせた。

「悪いわね、憂炎の……陛下の命とはいえ、私の手伝いまで頼んでしまって」

「いえ」

佩芳はかすかに口元に笑みを浮かべると、あ、と何かに気付いたかのように扉の方

向に視線を向けた。それからすぐに一歩下がりがり、その場に膝をつく。

と同時に、豪快に朱塗りの扉が開かれた。そこから姿を現したのは、今話題に出たばかりの人物——憂炎である。

皇帝としての権威を示す赤い長衣を翻したその姿は、ほんの少し前まで女の姿をして過ごしていたとは思えないほどに堂々としている、のだが。

(未だに見慣れないわね……)

ふとした折に、そんな感覚が胸を掠めるのは、仕方がないことだろう。

なにしろ、春燕が彼と過ごした時間は、女装をしていた期間の方が長いからだ。

なんだかそれがおかしくなつて、春燕はくすりと笑った。それに目ざとく気付いた憂炎が、軽く眉をしかめる。

「……なんだ」

「いえ、今の姿もすっかり堂に入ったものだな、と思つて」

春燕は内心を誤魔化すようにそう告げると立ち上がり、襦裙の裾を翻して窓際へと歩いて行つた。窓枠にもたれるようにしてそこから外を眺めれば、桃園の木々の緑に紛れ、白い蕾がその姿を現しているのが見える。

今準備している宴は、その桃の花を愛でる春の宴だ。もうじきほころび始めるであろうそれを心待ちにしているのは、春燕とて周囲の者達と変わらない。

だというのに、それを見つめていると、唇からため息が零れてしまう。

何かを言いたげだった憂炎は、そんな彼女の様子に何か思うところがあつたのだろう。気まずげに視線を逸らすと、ため息交じりに口を開いた。

「悪いな、おまえにこんなことを頼んで」

「別に良いわ。居候させてもらっている身だもの、これくらいお安いご用よ」

ただ、その——と、一瞬逡巡した春燕は、軽く首を振ると苦笑を浮かべつつ言葉を続けた。

「大丈夫なの？ 宴の当日はさすがに翠蘭さまがいないと格好が付かないのではな  
い？」

その問いに、憂炎は今度こそ肩をすくめた。そのまま黙って大股に春燕の元まで歩み寄ると、窓枠に手をかけ、身を乗り出すようにして窓の外に視線を向ける。

彼の視界にも春燕と同じ——桃園の様子が映っているはずだ。なんとはなしに、春燕も再び桃園に視線を向ける。互いにしばらく黙ったままそれを見つめていると、隣

から小さなため息が聞こえてきた。

目を向ければ、くるとこちらに背を向けた憂炎が小さく肩をすくめるのが見える。

「爛流を向かわせたからな。まあ……間に合うようには帰ってくるだろうよ」

「そう？ ならいいけど」

春燕は軽く首を傾げると、もう一度窓の外に目を向けた。あの花がちょうど咲く頃に、宴は執り行われる予定だ。実際、あと一週間もないだろう。

（それまでに、帰ってきてほしいわね……）

はあ、とついたため息は自分で思うよりも重たい響きがした。それはまるで、春燕が内心抱えている不安を現しているかのよう。

それを察したわけではないだろうが、憂炎は一呼吸置くと「今思い出した」とでも言うように口を開いた。

「最近どうだ、その……伯母上の方は」

「ああ……」

実を言えば、春燕も母である梓晴の動向がずっと気になっていた。そこをすばり聞かれて、一瞬身体が強張ってしまう。